銕仙会講座『能との新たな出会いⅢ』第一回資料

2014/8/29

1　能『鵜飼』を読む

鵜　飼

『梁塵秘抄』巻第二

鵜飼はいとほしや　万劫年経る亀殺し　また鵜の首を結ひ
現世はかくてもありぬべし　後生わが身をいかにせん

『古今著聞集』巻第二十「文覚上人高尾の猿鳥を捕りて鵜飼を模するを見る事」

文覚上人、高雄興隆の比、見まはりけるに、清瀧川のかみに大なる猿両三匹ありけるが、一の猿、岩のうへにあふのきふしてうごかず、いま二匹は、たちのきて居たりける。上人あやしみ思て、かくれて見ければ、烏一両とびきて、このねたる猿のかたはらに居たり。しばしばかりありて猿の足をつつきけり。猿なほはたらかず、死たるやうにてあれば、烏しだいにつつきて、うへにのぼりて、目をくじらむとしけるとき、猿烏の足をとりておきあがりにけり。其時のこりの猿二匹いできて、ながき葛をもちて、烏の足につけてけり。烏飛さらんとすれどもかなはず。さてやがて河にをりて、烏をば水になげ入て、葛のさきをとりて一匹はあり。いま二匹は河上より魚をかりけり。人の鵜をつかひけるをみて、魚をとらせむとしけるにや。烏を鵜につかふためし、はかなけれども、こころばせふしぎにぞ思よりたりける。烏は水になげ入られたれども、其益なくてしにければ、猿どもはうちすてて山へいりにけり。不思議なりし事、まのあたり見たりしとて、彼上人かたりける也。

能〈鵜飼〉

※現行観世流謡本による。ただし第二段は『謡曲大観』によった。

［　］＝小段名。　「　」＝コトバ。　『　』＝フシ。

五番目物。五流の現行曲。榎並左衛門五郎原作・世阿弥改作。

○又、鵜飼・柏崎などは、榎並の左衛門五郎作也。さりながら、いづれも、悪き所をば除き、よきことを入られければ、皆世子の作成べし。

○鵜飼の初めの音曲は、殊に観阿の音曲を移す。唇にて軽々と言ふこと、彼かかり也。此能、初めより終りまで、皆闌けたる音曲也。「面白の有様や」より、此一謡斗同音也。後の鬼も、観阿、融の大臣の能の後の鬼を移す也。

○鵜飼の能に、「真如の月や出ぬらん、真如の月や出ぬらん」、今の御所、馬場の能の時、下に早く言ひて、真中の坪に入ざりし也。「月や」から、きつきつと拍子にて持つて、「出ぬらん」と云て、行く足を宙に持つて、どうど踏む所也。かやうの所、下の拍子也。其能、入組の座並にてせしゆへ也。

○鵜飼の初め、直面に武笠着る、かやうのことは、田舎などにてのこと也。時によるべし。

○小癋見は、世子着出だされし面也。余の者着べきこと、今の世になし。彼面にて、鵜飼をばし出だされし面也。異面にては、鵜飼をほろりとせられし也。面も、位に相応たらんを着べし。

（『申楽談儀』）

前シテ―尉
後シテ―地獄の鬼
ワキ―旅僧
ワキツレ―従僧
アイ―里人

第一段　ワキの登場　旅僧が安房の清澄から甲斐の石和へとやって来る

［名ノリ］　ワキ「これは安房の清澄より出でたる僧にて候、我いまだ甲斐の国を見ず候程に、この度甲斐の国行脚と志して候

［サシ］　ワキ『行く末何時と白波の、安房の清澄立ち出でて、六浦のわたり鎌倉山

［上歌］　ワキ・ワキツレ『やつれ果てぬる旅姿、やつれ果てぬる旅姿、捨つる身なれば恥ぢられず、一夜仮寝の草むしろ、鐘を枕の上に聞く、都留の郡の朝立つも、日たけて越ゆる山道を、過ぎて石和に着きにけり、過ぎて石和に着きにけり。

［着キゼリフ］　ワキ「急ぎ候程に、これははや石和川に着きて候、日の暮れて候程に、この所に宿を借り泊らばやと思ひ候　ワキツレ「然るべう候

第二段　ワキ・アイの応対　旅僧は里人に一晩泊めてくれるよう頼むが断られる

［問答］　ワキ「石和川在所の人の渡り候か　アイ「石和川在所の者とお尋ねは、如何やうなる御用にて候ぞ　ワキ「是は往来の僧にて候、一夜の宿を御貸し候へ　アイ「尤も泊め申したくは候へども、この所の大法にて、往来の者に宿貸す事禁制にて候間、なるまじく候　ワキ「御大法はさる事にて候へども、平に一夜を明かさせて給はり候へ　アイ「いやいや我等一人として大法は破られ申さず候間、なるまじく候　ワキ「さては了簡なく候か　アイ「あら笑止や、なうなうお宿を参らせうずるにて候　ワキ「祝着申して候　アイ「あの川崎の御堂を貸し申さう　ワキ「その御堂に泊り候へば、方々に借るまでもなく候　アイ「我等が建てたる堂にてなく、寄り合ひ建てたる堂にて候さりながら、あの御堂へは夜な夜な光るものの上り候間、心得て御泊り候へ　ワキ「法力を以て泊り候べし　アイ「あらすねいお僧ぢやよ

第三段　シテの登場　尉が現れて闇夜に鵜を使う我が身の悲しさを嘆く

［一セイ］　シテ『鵜舟にともす篝火の、後の闇路を如何にせん。

［サシ］　シテ『げにや世の中を憂しと思はば捨つべきに、その心更に夏川に、鵜使ふ事の面白さに、殺生をするはかなさよ、「伝へ聞く遊子伯陽は、月に誓つて契りをなし、夫婦二つの星となる、『今の雲の上人も、月なき夜半をこそかなしみ給ふに、我はそれには引きかへ、月の夜頃を厭ひ、闇になる夜を喜べば

［下歌］　シテ『鵜舟に灯す篝火の、消えて闇こそ悲しけれ。

［上歌］　シテ『拙かりける身の業と、拙かりける身の業と、今は先非を悔ゆれども、かひも波間に鵜舟漕ぐ、これほど惜しめども、叶はぬ命つがんとて、営む業のもの憂さよ、営む業のもの憂さよ。

第四段　ワキ・シテの応対　従僧が数年前に会った鵜使いが殺されたことを尉は語って聞かせる

［問答］　シテ「いつもの如く御堂にあがり鵜を休めうずるにて候、や、これは往来の人の御入り候

よ　ワキ「さん候往来の僧にて候が、里にて宿を借り候へば、禁制の由申し候程に、さてこの御堂に泊りて候　シテ「げにげに里にてお宿参らせうずる者は覚えず候　ワキ「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ　シテ「さん候これは鵜使にて候が、いつも月の程はこの御堂に休らひ、月入りて鵜を使ひ候　ワキ「さては苦しからぬ人にて候ぞや、見申せばはや抜群に年たけ給ひて候が、かかる殺生の業勿体なく候、あはれこの業を御止りあつて、余の業にて身命を御つぎ候へかし　シテ「仰せ尤もにて候へども、若年よりこの業にて身命を助かり候程に、今さら止つつべうもなく候　ワキツレ「いかに申し候、この人を見て思ひ出したる事の候、この二三箇年前に、この川下岩落と申す所を通り候ひしに、かやうの鵜使に行き逢ひ候程に、科の中の殺生の由を申して候へば、げにもとや思ひけん、我が家に連れて帰り、一夜けしからず摂して候ひしよ　シテ「さてはその時の御僧にて渡り候か　ワキツレ「さん候その時の僧にて候　シテ「なうその鵜使こそ空しくなりて候へ　ワキ「それは何故空しくなりて候ぞ　シテ「恥かしながらこの業にて空しくなりて候、その時の有様語つて聞かせ申し候べし、跡を弔うて御やり候へ　ワキ「心得申し候

［語リ］　シテ「そもそもこの石和川と申すは、上下三里が間は堅く殺生禁断の所なり、今仰せ候岩落辺に鵜使は多し、夜な夜なこの所に忍び上つて鵜を使ふ、憎き者の仕業かな、彼を見顕さんと企みしに、それをば夢にも知らずして、また或夜忍び上つて鵜を使ふ、狙ふ人々ばつと寄り、一殺多生の理に任せ、彼を殺せと言ひあへり、『その時左右の手を合はせ、かかる殺生禁断の所とも知らず候、向後の事をこそ心得候べけれとて、手を合はせ歎き悲しめども、助くる人も波の底に

［下歌］　地『罪刑にし給へば、叫べど声が出でばこそ。

第五段　シテの立働き　尉は鵜使いの亡霊であることを明かして鵜飼の様子を見せる

［問答］　シテ「その鵜使の亡者にて候　ワキ「言語道断の事にて候、さらば罪障懺悔に業力の鵜を使うて御見せ候へ、跡をば懇に弔ひ申し候べし　シテ「あらありがたや候、さらば業力の鵜を使うて御目にかけ候べし、跡を弔うて賜はり候へ　ワキ「心得申し候

［掛ケ合］　シテ「既にこの夜も更け過ぎて、鵜使ふ頃にもなりしかば、いざ業力の鵜を使はん　ワキ『これはたこくの物語、死したる人の業により、かく苦しみの憂き業を、今見る事の不思議さよ　シテ「湿る松明振り立てて　ワキ『藤の衣の玉だすき　シテ「鵜籠を開き取り出し　ワキ『島つ巣おろし荒鵜ども　シテ「この川波にばつと放せば

［段歌］　地『面白の有様や、底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、潜き上げ抄ひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報いも後の世も、忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば、生簀の鯉や上らん、玉島川にあらねども、小鮎さばしるせせらぎに、かだみて魚はよもためじ、不思議やな篝火の、燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ。

第六段　シテの中入り　尉は名残りを惜しみながら姿を消す

［歌］　地『鵜舟の篝影消えて、闇路に帰るこの身の、名残惜しさを如何にせん、名残惜しさをいかにせん。

第七段　アイの物語　里人は鵜使いが殺害された時のことを旅僧に語って聞かせる

第八段　ワキの待受け　旅僧は石に経を書いて川に沈めることで鵜使いを供養する

［□］　ワキ「ただ今の老人は疑ひもなく、罪刑にせられたる鵜使の亡者にて候ふ程に、砂を拾ひ、一石に一字経を書き付け波間に沈め、かの者を成仏させうずるにて候
［上歌］　ワキ・ワキツレ『川瀬の石を拾ひ上げ、川瀬の石を拾ひ上げ、妙なる法の御経を、一石に一字書きつけて、波間に沈め弔はば、などかは浮かまざるべき、などかは浮かまざるべき。

第九段　後シテの登場　地獄の鬼が現れて鵜使いは僧を摂待したおかげで極楽往生したと告げる

［（サシ）］　シテ『それ地獄遠きにあらず、眼前の境界、悪鬼外になし、抑もかの者、若年の昔より、「江河に漁つてその罪夥し、されば鉄札数を尽し、金紙を汚す事もなく、『無間の底に堕罪すべかつしを、一僧一宿の功力に引かれ、急ぎ仏所に送らんと、悪鬼心を和らげて、鵜舟を弘誓の船になし
［（一セイ）］　シテ『法華の御法の済け船、篝火も浮かむ気色かな　地『迷ひの多き浮雲も　シテ『実相の風荒く吹いて　地『千里が外も雲晴れて、真如の月や、出でぬらん。

第十段　シテの物語　地獄の鬼は法華経の有り難さを讃える

［ロンギ］　地『ありがたの御事や、奈落に沈む悪人を、仏所に送り給ふなる、その瑞相のあらたさよ　シテ『法華は利益深き故、魔道に沈む群類を、救はん為に来りたり　地『げにありがたき誓ひかな、妙の一字はさて如何に　シテ『それは褒美の言葉にて、妙なる法と説かれたり　地『経とはなどや名づくらん　シテ『それ聖教の都名にて　地『二つもなく　シテ『三つもなく　地『唯一乗の徳によりて、奈落に沈み果てて、浮かみ難き悪人の、仏果を得ん事は、この経の力ならずや。

第十一段　結末　地獄の鬼は往来の僧を供養することが功徳になると説いて去っていく

［キリ］　地『これを見かれを聞く時は、これを見かれを聞く時は、たとひ悪人なりとても、慈悲の心を先として、僧会を供養するならば、その結縁に引かれつつ、仏果菩提に到るべし、げに往来の利益こそ、他を済くべき力なれ、他を済くべき力なれ。

2「空の働」とその他の小書について

空之働（むなのはたらき）　（観世流）

観世流の中でもいろいろな演じ方があり、その時々で演じ方を変えることもあるため、演じ方は一定ではない。例として、次のような演じ方がある。

○前シテ登場の段（第三段）は［一セイ］だけとなり、［サシ］［下歌］［上歌］が省略される。
○鵜の段（第五段）は橋掛りまで行って演技を行う。
○中入（第六段）は地謡が終わらないうちに幕に入る。
○間狂言（第七段）がなくなり、早装束（中入したシテが着替えてすぐに登場する）となる。
○ワキの待受（第八段）に通常はないセリフが入る。
○後シテ登場の部分（第九段）はまず半幕となり、後シテが勢いよく登場する。登場した後シテは舞台の中央に安座する。
○第九段の「真如の月や、出でぬらん」のあとに「働」が入る。

真如之月（しんにょのつき）　観世流）

○空之働とほぼ同じ内容になる。
○空之働よりは後シテの所作が多い。

無間（むけん）　（金剛流）

○観世流の「真如之月」とほぼ同じ内容になる。
○後場に「働」が入らない。

3　実技『殺生戒と救済』

善知鳥（うとう）

諸国一見の僧（ワキ）が陸奥外の浜へ向かう途上越中の立山に立ち寄り、山上の「立山地獄」といわれる地獄さながらの有様を見て、その恐ろしさにおののきつつ下山すると、麓で一人の猟師（前シテ）に出会い、「自分は外の浜の猟師で去年の秋に死んだ者。陸奥へおいでなら、わが妻子を尋ねて、家にある私の蓑・笠を手向けてくれるように言伝てほしい」と頼まれ、いまわのきわまで着ていたという麻衣の片袖を預かる〈中入〉。

僧がアイに教えられて猟師の家を訪れ、事の次第を語ると、猟師の妻（ツレ）は驚き、僧の携えた片袖を形見の衣に合わせてみると、ぴたりと合う。やがて僧が亡者の願い通り蓑・笠を手向けて回向していると、猟師の霊（後シテ）が現われ、卒都婆を建てての供養を謝しつつ、鳥獣を殺した重い罪を消してほしいと懇願する。猟師の妻子はその亡霊を見て泣く。亡霊は苫屋の内の妻子を見ることができず、後世の報いも忘れて漁猟に夢中になって過した我が殺生の罪を思い、善知鳥の子鳥を捕えて親鳥を嘆かせたさまをまざまざと思い起して懺悔する。と見るうちに地獄の責め苦が激しく猟師を襲う。生前殺した鳥が鉄の嘴を鳴らし、銅の爪で眼をつかみ肉をさく。鷹に襲われる雉のように猟師はただ恐怖におののく。苦しい声の下から「御僧助けてたべや」と訴えて失せる。

阿　漕（あこぎ）

伊勢参宮のために日向を発った男（ワキ）が、伊勢の阿漕ヶ浦に至り、そのあたりの景物を尋ねようと人を待っていると、殺生を業とする身の前世の宿業を嘆きつつ、一人の漁翁（前シテ）が現われ、ここは「逢ふことも阿漕が浦に引く網も度重なれば顕れやせん」と詠まれた名所だと教え、さらに、太神宮に供える魚を捕る所であるのに、阿漕という猟師が禁を犯して夜毎に密漁し、ついに露顕して捕えられてこの沖に沈められたこと、彼が死後に阿漕の悪名を残し、冥途でも呵責の責めに苦しんでいることをのべ、菩提を弔ってほしいとたのむ。やがて漁火のともるころ、漁翁は舟を漕ぎ出して網の綱を手繰り寄せ始める。と、にわかに疾風が吹き起り、海面は闇につつまれ、漁火も消え、「こはそも如何に」との叫び声を残して漁翁は失せる〈中入〉。

男が法華経を読誦していると、阿漕の亡霊（後シテ）が四手網を手にして現われ、密漁の網を打ち、魚を追い込むさまを見せるが、それがいつしか地獄の猛火に焼かれる体となり、悪魚毒蛇に苦しめられる冥途での受苦のさまとなって、漁翁は「旅人よ助け給へや」と懸命に呼びかけながら、再び波の

底へ姿を消す。

（三省堂『能楽ハンドブック』による）